

*****ハマグリの放流技術を開発中*****

浅海干潟研究部 渡辺裕倫

熊本県は、日本在来種であるハマグリの全国最大の生産県ですが、近年はその漁獲量が大きく減少しています。

本県ではアサリと並び干潟の採貝漁業の対象魚種として重要なハマグリは、高級食材として高値で取引されることから、全国各地でその価値が再認識されており、近年、資源の回復やブランド商品としての販売促進が取り組まれ始めています。

このハマグリを本県の特産種としてブランド化を進め、全国市場での地位を確固たるものにするためにも、漁獲量の安定・増大を図ることが急務となっており、そのための対策として、今年度から3年間の予定で、ハマグリ稚貝の種苗生産や中間育成技術を開発し、新たな栽培魚種としての可能性を検討する事業が始まりました。

このうち、種苗生産と中間育成技術の開発については、当センターの養殖研究部、(財)熊本県栽培漁業協会、そして民間企業との共同で試験を実施していますが、浅海干潟研究部では、生産された種苗を「いつ、どこに、どのように放流すれば最も放流の効果が高まるか」という「放流技術の開発」に取り組んでいます。

今年度は、漁業者の手により漁獲されたハマグリを買い取り、それに標識をつけて、季節毎に、いろいろな場所に放流し、放流されたハマグリが、再び「どこで」、「どれくらい」捕獲されるかの調査を行い、ハマグリの移動生態や回収率を算出する計画です。

従来の貝類の放流試験では、油性の塗料などを用いて標識をしていましたが、今回は「レーザーマーカ―」と呼ばれる工業機器を用いた刻印標識法を採用しました。

レーザーマーカ―は、レーザーを照射して物質を熱加工するもので、工業分野では古くから実用化されている機械であり、代表的な例としてはペットボトルの製造年月日の印字などがあります。

標識の文字等は、パソコン上で容易に設定することができ、多種多様な刻印標識が可能のため、放流場所毎・季節毎といった多様な標識放流が行えます。また、将来的には、水揚げされたハマグリの産地証明への応用といった利用方法も考えられます。

8月中旬に緑川河口域の干潟において、今年度1回目の標識放流を行い、現在その追跡調査を実施中です。下の写真のような刻印標識の入ったハマグリを再捕されたときは、所属する漁協へ持ち込みいただき、再捕された場所などをお知らせいただきますようよろしくお願いいたします。

貴重なハマグリの安定生産に向けた研究に対して皆さまの御協力をお願いします！！

